

リレー 橋友録 私の橋歴書



私が首都高道路公団（現 首都高道路株式会社）に入社した1988年はまさにわが国の橋梁事業の絶頂期であった。同年瀬戸大橋、翌年横浜ベイブリッジが開通し、レインボーブリッジや明石海峡大橋の建設も佳境を迎えていた。私が首都高に入社したと思っただ理由も、レインボーブリッジや鶴見つばさ橋に関わる仕事があったからである。ところが、

<792>

ら、一生懸命勉強した。そして、勉強すればするほど、その上流側、すなわち、橋の点検・診断技術、劣化予測の精度等に問題があることを知り、日大に異動したことを契機に実橋を対象とした研究に着手した。

M解析等を通し、橋の早期劣化に至った原因を徹底究明し、こうした症例と蓄積がその他多くの橋と共に、名無し橋に名前を付ける「橋の名付け親プロジェクト」、地域住民が橋の清掃等簡易な予防保全を行う「橋の歯磨きプロジェクト」を進めている。これらの取り組みを通して、地域住民がこれまで無関心だった橋に関心を持ち、愛着へとつながればと考えている。

現在の東北地方における大きな課題に、橋をはじめとする復興インフラの長寿命化が挙げられる。東日本大震災からの復興は、阪神淡路大震災よりも広域に、高度経済成長期よりも迅速に進める必要がある。人も材料も不足している中、何も策を講じなければ低品質で、劣化しやすい構造物ができることは自明である。スピード感を持って、復興インフラを長寿命化させるには、技術者が知恵を寄せ合い、あらゆる技術を駆使して丈夫で長期保全を行う「橋の歯磨きプロジェクト」を進めなければならない。橋梁技術者の腕の見せ所である。

世界の橋の探訪は実学を兼ねた趣味となりつつある。橋の探訪は基本的に英語も通じない中、公共交通機関を乗り継いでミヨコ高架橋やガンター橋を訪れた。苦労した先に見た力学的に合理的な橋は、自ずと周囲の景観に溶け込み、実に美しい。これからも橋の関わりが益々増えるであろう。

次は首都高技術の寺山徹氏にリレーします。

橋との関わり

日本大学

教授 岩城 一郎

本海沿岸に架かるPC道路橋で、塩害により著しく劣化したため架替えを余儀なくされた。そこで、青森県のアセットマネジメント事業の一環として、橋の詳細調査を実施した。載荷試験 撤去桁の解剖（コンクリートと鋼材の物性評価）、FE

な予防保全である。また、

鋼材の物性評価）、FE

50年経過の橋増加 保全に注力

「官と一緒や
ついでに必要だ。
保全に、このよう

す